

訳者から

これは、パレスチナ人権センター（Palestinian Centre for Human Rights : PCHR）が2026年1月9日に公表した報告書 **GHF Aid Distribution Centers in Gaza: Starvation, Killings and Humiliation of Women** [ガザ地区におけるガザ人道財団（GHF）支援物資配布センター：飢餓、殺害、女性への侮辱] の全訳です。

ガザ人道財団（GHF: Gaza Humanitarian Foundation）とは、イスラエルと米国政府の支援を受けた組織で、公には、ガザ地区に対するイスラエルの封鎖で引き起こされた継続的な飢餓と人道危機の中での人道支援の名のもとに2025年2月に設立、2025年10月に活動を停止、2025年11月に閉鎖された組織です。GHFは物資がハマスによって日常的に横流しされているというイスラエル側の虚偽の主張への対策として、国連を迂回して支援物資をガザに届けることを意図し、2025年5月に活動を開始していました。

しかしながら、人道支援をうたいながら、GHFの配布拠点周辺では繰り返し大量殺戮が発生し、国連人権高等弁務官事務所(OHCHR)は2025年8月15日現在で、5月27日以降に食糧を求めて死亡したパレスチナ人1,760人のうち、994人がGHF拠点周辺で殺害されたと報告しています。OHCHRのスタッフ、ガザ当局者、目撃者の証言から、この殺害・攻撃はイスラエル国防軍(IDF)およびGHFの米国人請負業者によるものだと明らかになっていますが、GHFとIDFは死傷者についての責任を否定し、警告射撃のみ行ったと主張しています。支援現場で繰り返された大量殺戮の生存者たちは、イスラエルが支援するこの作戦を援助ではなく「死の罠」と呼び、国境なき医師団(MSF)は、こうした状況を「援助を装った虐殺」、「組織的な殺害」と表現しました。また、この殺戮を米国メディア・フランチャイズにちなみ「ハンガー・ゲーム」と呼ぶ人権活動家もいました。

国連や他の援助団体はGHFとの協力を拒否し、支援の政治化や「武器化」、パレスチナ人にとって安全でなく尊厳を傷つける方法で援助を届けていると非難し続けていました。

GHFの活動は、2025年10月のガザ停戦を受けて一時停止され、同団体のスポークスパーソンは活動再開の意向を表明していましたが、2025年11月、GHFはガザでの活動を永久に終了すると発表し、「ガザ住民への支援にはより良い方法があることを示すという使命を達成した」と述べています。

本報告書は、GHFがガザ地区で活動していた期間の女性の悲惨な状況に特に焦点を当て、生存者や目撃者たちの生の叫びをもとに作成されたものです。この声を是非多くの方に届けたいと思います。

三毛猫プロジェクト

オリジナルの英語版は以下からダウンロードできます。

<https://pchrgaza.org/pchr-publishes-report-on-ghf-aid-distribution-centers-and-the-targeting-of-women-through-starvation-killing-and-humiliation/>

前書き

パレスチナ人権センター (PCHR) は本日、新たな報告書「ガザ地区におけるガザ人道財団 (GHF) 支援物資配布センター：飢餓、殺害、女性への侮辱」を公表しました。本報告書は、飢餓を戦争の手段として意図的に利用するなど、2023年10月7日以来イスラエル占領軍が課している組織的な飢餓政策を明らかにしています。本報告書はさらに、ジェノサイドの犯罪に相当する、この政策の結果生じた重大な人権侵害を記録し、国境検問所の閉鎖を含む一連の強制的行為にも焦点を当てています。パン屋や農場の破壊、燃料やその他の必需品の遮断、人道援助車列の妨害、民間人だけでなく人道援助従事者も標的にされているのです。こうした政策と慣行によって、生きることが、深刻なリスクを伴う日常的な闘いになってしまいました。特に女性、子ども、高齢者、その他の脆弱なグループに影響が及んでいます。

本報告書は、米国が直接資金を提供するガザ人道財団 (GHF) が2025年2月に設立されたことが、この犯罪の最も深刻な現れの一つであったと強調しています。GHFは2025年5月下旬から10月にかけて人道支援の配給を担当しました。報告書は、GHFが実施した人道支援がいかにも人命救助という性質をそぎ落とし、事実上致命的な危害のメカニズムとなっているかを明らかにしています。この枠組みの中で、人道支援は、飢餓や屈辱、故意の殺人や重傷を負わせることで民間人を絶滅させることを目的とした軍事戦略の一環として行われてきました。

本報告書は、GHF活動期間のガザ地区の女性の状況を特に強調しています。このような状況の中で、女性は標的と苦しみとのサイクルの最前線に立たされ、直接的な殺害、重度の身体的傷害、夫や子ども、主な稼ぎ手の喪失の間に挟まれていることに気づきました。これらの侵害は、家族の役割の強制的な変化によって悪化し、女性は家族やコミュニティの中で責任を拡大し、二重の負担を負うことを余儀なくされました。深刻で周知のリスクにもかかわらず、女性は家族の飢餓を食い止めることができる最低限の食糧を確保するために、必死になって援助物資の配給場所に行かざるを得ませんでした。このような状況の中で、食糧入手という行為は日常的な生存手段ではなくなり、命を脅かす行為になっていました。

本報告書は、PCHRで記録された生存女性と目撃者の証言に基づいています。これらの証言は、意図的な殺害、深刻な身体的傷害、子どもや夫の死、人間の尊厳への屈辱、そしてその結果として女性に課された社会的役割の強制的な変化を記録しています。これらには、意図的な殺害、身体的・精神的な危害、国際法の下で保護されている集団の部分的または全面的な破壊を意図する行為が含まれており、ガザ地区の民間人に対するジェノサイドがさらに広がっていることが明らかです。

PCHRは国際社会に対し、法的・道義的責任を遵守し、ガザで深刻な違反を引き起こした援助分配政策に関与したすべての当事者の責任を問うために緊急行動をとるよう求めます。これには、これらの政策の実施を承認または監督した軍および政治当局者、ならびにその実施を促進または参加した者が含まれます。PCHRは、被害者の権利を保護し、国際司法の原則を擁護するために、責任者が責任を問われることを確保し、免責の文化を終わらせるために、必要なすべての法的措置をとることの重要性を強調します。



المركز الفلسطيني لحقوق الإنسان
PALESTINIAN CENTRE FOR HUMAN RIGHTS

GHF Aid Distribution Centers in Gaza: Starvation, Killings, and Humiliation of Women



GHF Aid Distribution Centers in Gaza:

Starvation, Killings and Humiliation of Women

ガザ地区におけるガザ人道財団（GHF）支援物資配布センター：

飢餓、殺害、女性への侮辱

目次

はじめに

イスラエルの組織的な政策としてのジェノサイド戦争手法

ガザ地区における組織的ジェノサイド犯罪の手法としての人道支援物資配布センター

ガザの女性と米国が資金提供した支援地域における組織的ターゲティング

- 1：米国支援物資配布センターでの女性の殺害
- 2：米国支援物資配布所での女性の身体的損傷
- 3：強制的な家族の役割の転換
- 4：女性への屈辱的な処遇

結論

はじめに

2023年10月以降、イスラエルはガザ地区の民間人に対し、飢餓を意図的に戦争手法として用いる組織的な飢餓政策を実施してきた。この政策は、国境検問所の閉鎖、施設や農場の破壊、燃料その他の必需物資の供給遮断、人道支援物資輸送の妨害、民間人・人道支援従事者への標的攻撃など、一連の威圧的行為を通じて実行されている。これらの政策と行為は、生存そのものを致命的なリスクを伴う苦闘の日々へと変貌させ、特に女性、子ども、高齢者、その他の脆弱な集団に深刻な影響を与えている。このような政策の最近の表れの一つが、2025年2月に米国による直接資金提供から設立されたガザ人道財団（GHF）である。GHFは2025年5月下旬～10月に人道支援物資の配給責任を担った。しかしながら、この財団の登場は、人道支援の持つ救命的性格を奪い取ったばかりか、支援を致命的な危害を与える手段に変質させ、広範な組織的暴力構造の一部にしてしまった。この枠組みの中で、人道支援が、飢餓、屈辱、意図的な殺害、深刻な身体損傷をもたらし、ガザ地区の市民の絶滅を目的とした軍事戦略の一部として利用されてしまった。

本報告書は、GHFの活動期間（2025年11月の活動停止発表まで）にガザ地区の女性を標的とした深刻な苦難と重大な人権侵害の実態を記録し、明らかにすることを目的とする¹。この非人道的な体制下で、女性たちは危機の中心に置かれ、戦闘、包囲攻撃、飢餓、負傷という過大な負担を背負わされている。多くの女性が、夫や子供等の主要な生計維持者を殺害されていた。命の危険が待っているにもかかわらず、女性たちは家族を飢餓から守る最低限の食糧を確保しようと、必死に支援物資配布所へ向かうことを余儀なくされてきた。ガザ地区では、食糧を入手する行為はもはや日常的な生存手段ではなく、代わりに命を脅かす危険な行為になっているのである。女性たちは基本的な生計手段を確保しようと、致命的な危険に晒されているのである。これらは、人間の尊厳と生存という基本的権利に対する重大な侵害をもたらす、イスラエルによる組織的な残虐行為の構図を示す。

本報告書は、パレスチナ人権センター（PCHR）が記録した証言に基づき、米国援助物資配布拠点への攻撃時にガザ地区で女性たちが直面した凄惨な現実を検証し、意図的な殺害、深刻な身体的傷害の加害、家族の役割の強制的な転換、人間の尊厳の貶めなど、女性に対して行われた一連の犯罪を記録する。さらに、こうした政策は民間人に対するジェノサイドによる罪の明白な拡大であることを明らかにする。

¹ BBC Arabic (25 November 2025). U.S.-backed “Gaza Humanitarian Foundation” ends its operations in Gaza. <https://www.bbc.com/arabic/articles/cnv2jeq41qyo>

イスラエルの組織的な政策としてのジェノサイド戦争手法

2023年10月以降、ガザ地区はイスラエル当局者による公的な宣言を受けて、前例のない組織的な飢餓状態に置かれている。広く報じられた声明として、イスラエル国防相ヨアヴ・ガランは次のように宣言した。「我々はガザに完全な封鎖を課す。電気も食糧も水も燃料もなし - 全てを遮断する」²。この声明は、イスラエルの国家安全保障相イタマル・ベン・グヴィルによって補強された。「ハマスが人質を解放しない限り、ガザに入るべきものは空軍の爆弾数百トンだけであり、人道支援物資は一滴たりともあってはならない」³。これらの声明は、軍事的圧力と集団的処罰の手段として、飢餓を明示的な政策として公式に認めたものである。これらの決定を受け、ガザへの全越境地点が完全に閉鎖された結果、軍事攻撃開始後数週間で食糧備蓄は急速に枯渇した。

2023年10月21日以降、軍事攻撃開始以来初めてラファ越境地点が限定的に開放された。しかし、ガザ南部への人道支援物資の流入は依然として極めて乏しく、戦争前の1日平均供給量の僅か4%に留まった⁴。支援物資輸送隊は不透明で複雑なイスラエルの検査手続きの対象となり、トラック入域を頻繁に阻まれ、待機の繰り返しを余儀なくさせられた⁵。さらに多くの救援物資輸送隊が直接に攻撃された⁶。爆撃による道路破壊、通信網の完全遮断、大規模な強制避難の連鎖が相まって危機は深刻化し、援助物資の配布プロセスはほぼ不可能となった。

2024年初頭、ガザ地区の食糧不足は壊滅的な水準に達した。数千世帯が1日2食から2日に1食へと食事を減らさざるを得なくなり、全く食糧を確保できなくなった世帯もあった。この期間、必要な食糧援助のわずか17%しかガザ地区に入らず、前年の66%から大幅に減少した。その結果、特に最も脆弱で深刻な影響を受けた子どもたちを中心に、栄養不良が蔓延した⁷。

² Channel 14 (2023), a video on YouTube. <https://www.youtube.com/watch?v=nLXJx9C3Fgs>

³ Ben-Gvir, Itamar (2023). Itamar Ben-Gvir on the X platform, 17 October 2023. <https://x.com/itamarbengvir/status/1714340519487176791>

⁴ United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs (OCHA) (2023). Hostilities in Gaza and Israel | Flash Update No. 15.: <https://www.ochaopt.org/content/hostilities-gaza-strip-and-israel-flash-update-15>

⁵ United Nations General Assembly (2024). Starvation and the right to food, with an emphasis on the Palestinian people's food sovereignty – Report of the Special Rapporteur on the right to food, Michael Fakhri. 17 July, para. 51.: <https://www.un.org/unispal/document/right-to-food-report-17jul24/>

⁶ See, for example: United Nations News (2024), “UN food agency suspends staff movements in Gaza following attack.” <https://news.un.org/en/story/2024/08/1153701#:~:text=A%20%E2%80%9Cclearly%20marked%20UN%20humanitarian,at%20UN%20Headquarters%20on%20Wednesday>

⁷ Norwegian Refugee Council (2024), “Israel’s siege now blocks 83 of food aid reaching Gaza, new data reveals,” 16 September. <https://www.nrc.no/news/2024/september/israels-siege-now-blocks-83-of-food-aid-reaching-gaza-new-data-reveals>

2024年1月26日、国際司法裁判所（ICJ）は、人道支援物資のガザ地区への搬入を確保するため、イスラエルに対し即時かつ効果的な暫定措置を講じるよう命じる判決を下した⁸。この決定にもかかわらず、イスラエルは判決を完全に無視し、救援物資輸送隊の入域を阻止し続けた⁹。人道支援従事者は任務遂行中に頻繁に直接攻撃された。包囲網強化の中、ガザ北部は致命的な奇襲地帯と化し、ごく限られた数のトラックのみが入域を許可される完全包囲状態となった。これらトラックの多くは爆撃や狙撃の標的となり、人道支援へのアクセスは危険な任務となった¹⁰。

並行して、イスラエル当局はガザにおける人道支援の主要提供機関としての国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）の役割を弱体化させる組織的キャンペーンを開始し、多くの国々に資金提供の停止を迫った¹¹。2024年3月、国連はイスラエルからUNRWAの食糧輸送隊のガザ北部への通行を一切許可しないことを通知され、これにより民間人向けの唯一の主要な救援ルートは事実上遮断されてしまった。UNRWAのフィリップ・ラザリーニ事務局長は、この決定を飢饉を引き起こす意図的措置とし、UNRWAの活動阻止は民間人にとって最後の命綱を断つことになる旨を指摘した。同氏は、UNRWAがガザの人道支援の基幹であり、避難民コミュニティに到達する最大の能力を有していると強調した¹²。

⁸ International Court of Justice (2024), Application of the Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide in the Gaza Strip (South Africa v. Israel) – Order of 26 January 2024, paras 72 .and.86
<https://www.icj-cij.org/sites/default/files/case-related/192/192-20240126-ord-01-00-en.pdf>

⁹ See, for example, United Nations World Food Programme (WFP) (2024), “Delivering food to northern Gaza faces further set-backs.”: <https://news.un.org/ar/story/2024/03/1128977>

¹⁰ World Central Kitchen (WCK) (2024), “7 WCK team members killed in Gaza.”:
<https://wck.org/news/gaza-team-update>.

¹¹ Human Rights Watch (2024), “Gaza: US, UK Outliers in Holding Back UNRWA Funding,” Human Rights Watch, 23 July 2024.
<https://www.hrw.org/news/2024/07/18/gaza-us-uk-outliers-holding-back-unrwa-funding>

¹² United Nations News (2024), “Israel tells UN it will reject UNRWA food convoys into northern Gaza”,
<https://palestine.un.org/en/264314-israel-tells-un-it-will-reject-unrwa-food-convoys-northern-gaza>

3月28日、国際司法裁判所（ICJ）は新たな判決を下し、飢餓が差し迫った脅威であるだけでなく、事実上の現実となっていることを強調した¹³。その直後、イスラエル占領軍（IOF）はラファ検問所を掌握し、支援物資の搬入をほぼ完全に禁止した。5月には3回目の判決により、ラファでの軍事作戦停止と支援物資搬入許可が命じられたにもかかわらず、大量の救援物資は許可されなかった。しかし支援の流れはほぼ途絶えたままで、飢餓はガザ地区全域に拡大し続けた¹⁴。

イスラエルは救援物資の入域を一部譲歩し、限定的な食糧供給搬入を許可したが、その後この措置は人道危機の緩和の目的ではなく、むしろ軍事的圧力の追加手段として利用された。IOFは支配地域に協力者を配置し、援助物資を運ぶトラックを標的に積荷を没収し、既に飢餓状態にあるガザ住民の食糧へのアクセスを奪った。GHFセンターの設置は、ガザ人口の約85%に食糧を供給する国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）を「テロ組織」と認定したイスラエル議会の宣言に続く、この飢餓政策の最新の政策表明であった¹⁵。これらセンター

は、意図的に設計・実施され、民間人に危害を加え、個人を屈辱的で尊厳を損なう状況に晒すことを目的とした。強制的な飢餓状態に耐えた後、市民はこれらのいわゆる「人道支援センター」を利用せざるを得ず、そこで長時間にわたり行列に並ばされ、しばしば銃撃、逮捕、拷問、爆撃を受けた。こうした行為により、女性、子供、高齢者を含む 2 千人以上のパレスチナ人が殺害され、数百人が重傷を負った。結果として、これらのセンターは組織的な死の罫と化し、特に IOF の完全支配する人口密集地域では、ガザ住民に対する広範なジェノサイド政策の一環として機能した。

この組織的政策の結果、少なくとも 460 人のパレスチナ人が飢餓で死亡し、さらに 2,600 人以上の飢えたガザ住民が、人道支援を装った死の奇襲作戦によって殺害された 16。極度の困窮状態と包括的な記録がほぼ不可能な状況を踏まえると、多くの死者が記録されておらず、実際の犠牲者数は遙かに多いと予想される。

13 International Court of Justice (2024), Application of the Convention on the Prevention and Punishment of the Crime of Genocide in the Gaza Strip (South Africa v. Israel) – Order of 28 March 2024, para. 21.

<https://www.icj-cij.org/sites/default/files/case-related/192/192-20240328-ord-01-00-en.pdf>

14 United Nations General Assembly (2024), Starvation and the right to food, with an emphasis on the Palestinian people’s food sovereignty – Report of the Special Rapporteur on the right to food, Michael Fakhri, 17 July, paras. 62–64:

<https://www.un.org/unispal/document/right-to-food-report-17jul24/>

15 The Times of Israel. (2024, October 29). Knesset approves laws barring UNRWA from Israel, limiting it in Gaza and West Bank.

https://www.timesofisrael.com/knesset-approves-laws-barring-unrwa-from-israel-limiting-it-in-gaza-and-west-bank/?utm_source=chatgpt.com

16 Government Media Office (10 October 2025), Press Release No. (1000). <https://t.me/s/mediagovps>

ガザ地区における組織的ジェノサイド犯罪の手法としての人道支援物資配布センター

2025 年 5 月下旬～10 月に、ガザ地区における支援物資の配給プロセスは、新たに設立された枠組み、いわゆるガザ人道機構 (Gaza Humanitarian Organization) によって管理・実施された。この機構は、2025 年 2 月にイスラエルによって創設され、米国から直接資金提供を受けている非政府組織 (NGO) である 17。同機構は明示的に「人道的」な使命の下で援助配給の責任を委ねられていたが、実際には IOF の完全な軍事支配下にある地域において、同軍が課した厳格な安全保障措置のもとで活動していた。この枠組みが、ガザ地区における人道支援管理の危険な変質をもたらした。苦難を緩和するどころか、新たな運用手段を通じて包囲を再形成し、人道支援を軍事的圧力的手段として利用することで、民間人を服従させ生存能力を失わせることを目的とした。その結果、この政策は民間人の生存の基本的条件を直接脅かし、食糧支援を受けようとした数百人のパレスチナ人が殺害された。2025 年 10 月までに、支援を求めて死亡したパレスチナ人 (いわゆる「生計の殉教者」) の数は少なくとも 2,615 人に達したが、民間人がこれらの場所へ訪れたのは生存を求めてであり、命を危険に晒すためではなかったことを強調しておく 18。

17 OHCHR. (2025, August 5). UN experts call for immediate dismantling of Gaza Humanitarian Foundation. <https://www.ohchr.org/en/press-releases/2025/08/un-experts-call-immediate-dismantling-gaza-humanitarian-foundation>

18 Palestinian Ministry of Health, Telegram platform (10 October 2025), Daily Statistical Report on the Number of Martyrs and Injured as a Result of the Israeli Aggression on the Gaza Strip. <https://t.me/MOHMediaGaza/7061>

この計画は、中立的な人道組織や国際機関、とりわけ長年にわたりパレスチナ住民への人道支援の主要な提供者であった国連及び UNRWA を意図的に排除したため、国際人道法及び人道支援活動を規定する確立された基準に根本的に違反していた。当時現地で入手可能な情報によれば、この新たな援助配分機構の管理責任は、ジュネーブに拠点を置く新たに登録された非営利団体「ガザ人道財団 (GHF)」に移管され、同財団は新たに課された枠組み下でこのプロセスを運営した **19**。

国連は、イスラエル当局が課した援助配分政策が、国連及びその国際パートナーが運営する既存の人道支援枠組みを解体して、支援を IOF の完全な監督・管理下に置き、軍事的現場状況によって決定させる仕組みに置き換える組織的試みであると強調している。国連はさらに、この政策が人道支援の中核原則に対する明白な違反であると評価した。なぜなら、救命物資の流れに対する完全な支配を行使し、ガザ地区の民間人に対する圧力手段として人道支援をツールにしようとするものだからだ。国連は、この手法が人口の大部分 - 特に最も脆弱で移動手段のない集団 - が必須支援にアクセスする機会を奪う可能性が高く、救援活動の人道的目的と明確に相反すると警告した。また、この危険な政策が、食糧を求めて戦闘地域に命がけで立ち入る民間人を増加させ、人道支援要員をも危険に晒すと警告した。さらに、こうした行為が強制的避難を緩和するどころか固定化させるリスクがあり、人道支援を生存手段から軍事戦略の一部として用いられる強制手段へと変質させかねないと指摘した **20**。

イスラエル占領軍 (IOF) がガザ地区への人道支援物資の搬入に関する公的声明を継続して発表する中、パレスチナ人権センター (PCHR) の現地監視は、これらの主張と明確に矛盾する実態を明らかにした。人道支援物資の流れに実質的な改善は見られず、わずか数十台に過ぎない限られた支援トラックのみが入域を許可され、安全確保や公平な分配を保証する効果的な措置は一切講じられていなかった。人道支援は IOF の完全な支配下にある地域に限定され、数千人の民間人が食料を入手するために命を危険に晒すことを余儀なくされた。また、支援物資の配布は主に以下の4か所、ラファのタル・アル・スルタン、ラファのサウジ地区、ラファ北部のハーン・ユニス、ガザ溪谷 (ネツァリム回廊) 地域であった。これら地域の住民は全員、以前に強制避難させられていたため、支援物資配布地点に到達するには、あらゆる局面で致命的な危険を伴っていた **21**。

19 Geneva Solutions. (2025, May 15). A Geneva-based foundation at the heart of Israel's Gaza aid plan. <https://genevasolutions.news/peace-humanitarian/a-geneva-based-foundation-at-the-heart-of-israel-s-gaza-aid-plan>

20 United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs – Occupied Palestinian Territory. (2025, May 4). Statement by the Humanitarian Country Team of the occupied Palestinian territory on principled aid delivery in Gaza. OCHA OPT.

<https://www.ochaopt.org/content/statement-humanitarian-country-team-occupied-palestinian-territory-principled>

-aid-delivery-gaza

21 Palestinian Centre for Human Rights (PCHR), (10 July 2025), «In Persistence of Starvation and Genocide, Israel Kills Children and Women in Deir al-Balah While Searching for Food»
<https://pchrgaza.org/in-persistence-of-starvation-and-genocide-israel-kills-children-and-women-in-deir-al-balah-while-searching-for-food/#~:text=In%20Persistence%20of%20Starvation%20and,and%20preserve%20their%20fragile%20lives.>

ガザ地区で支援を求める人々は、激しい衝突地域を横断することを余儀なくされ、特に北部や中部ガザからの避難民は、数十キロを超える距離を何時間も歩いて移動しなければならない。支援物資配布地点に到着すると、市民は複雑で非人権的な検査手続き（顔認識や身元確認を含む）を強いられた。これらは IOF の厳重な監督下、米国の警備会社によって実施されたと報告されており、イスラエル占領軍（IOF）の兵力はこれらの拠点周辺に集中配置されていた。この過酷で危険な旅路は食糧へのアクセスだけで終わらなかった。むしろ配布センター自体が危険な環境となり、保護措置・安全回廊・効果的な人道保護策が欠如する中、市民は直接の標的とされた。広範な飢餓と実行可能な代替手段の欠如の中で、民間人は 2 つの等しく危機的な選択を迫られた。飢餓による死を覚悟するか、食糧確保を試みる際に爆撃と屈辱の危険を冒すかである。この状況下で、生存手段となるべき人道支援は、苦難を固定化し、飢餓政策とジェノサイド的行為を組織的に永続させるツールになっていた **22**。

22 PCHR Staff field monitoring.

ガザの女性と米国が資金提供した支援地域における組織的ターゲティング

ガザ地区の女性たちは、イスラエルの支援物資配布政策により、さらに負担が重くなり、複合的な悲劇に耐えなければならなかった。基本的な人道的ニーズを満たすために設置されたセンターは、女性の生命と尊厳を脅かす高リスクな場所に変化した。多くの女性が食糧を入手しようと命を落とし、重傷を負った者もいた。長距離を歩き、何時間も待ち続け、過密で混乱した状況に巻き込まれ、屈辱のかつ品位を傷つけられた者もいた。この状況は、最も基本的な人道保護の基準が崩壊していることを如実に物語っている。子どもや配偶者を失ったことで苦しみはさらに増幅され、多くの女性が肉体・精神的に消耗する過酷な状況下で、家族を支える唯一の責任を負わざるを得なくなった。

1：米国支援物資配布センターでの女性の殺害

ハディージャ・アブ・アンザ（46 歳）の姉であるサマー・アブ・アンザは、人道支援物資を受け取るために待機中だった彼女の妹が IOF に殺害された瞬間を目撃した、あの悲劇的な日の詳細を語った。

「2025 年 7 月 24 日、朝 7 時頃、私は妹のハディージャ、妹の友人たち、私の娘のファラーと共に、カーン・ユーンイスのアル・ナムサウィ地区、殉教者マフムード・アル・マブフ学校の避難所から、ラファ北部アル・ハッシュヤシュ地区にある米国支援物資配布センターへ向かいました。この日は女性限定の支援物資配布日と聞いていました。当時は経済状況が極めて厳しく、家族を支える食糧や生活必需品が緊急に必要でした。そのため、距離が遠いにもかかわらず、私たちは一緒に行くことに決めました。

約 30 分歩いた後、アル・マスラク・アル・トゥルキ（アル・ティナ通り）に到着しました。配布を待ち場所まで早く到着するために、小型車両に乗り込みました。到着後、配布センターが開いておらずしばらく待機していたところ、僅か数メートル先にイスラエル軍の戦車が突然現れ、無差別に発砲しました。同行していた女性 2 名が負傷しました。1 人は肩に銃弾を受け、もう 1 人は腹部を撃たれました。この時、人道支援を待つ数千人の女性たちに混乱と極度のパニックが起き、間もなく、戦車にいた兵士が退却を合図したので、私たちはそれに従って、トルコ人居住区ハウォズ地区のすぐ裏手にある農地まで徐々に後退しました。そこでは負傷した女性たちが地面に横たわっていましたが、救急車も医療支援も来ませんでした。すぐに IOF 車両 2 台が到着し、その農地付近を無差別に発砲しました。この全ての出来事は午前 9 時前に起こり、私たち、そして他の女性たちが、まだ支援物資配布センター開所を待っていた時間帯でした。

配布センターが開く予定時刻の僅か 1 分前、午前 8 時 59 分頃、戦車と軍用車両の砲撃が劇的に激化しました。突然、私の妹のハディージャがうつ伏せに地面に倒れ、周囲の人々も皆地面に伏せました。彼女の友人が助けを求めて叫び、銃撃が一時的に止んだ隙に、私は妹の状態を確認しようと彼女を仰向けにしました。彼女の口と鼻からは血が流れ出しており、負傷箇所を特定できませんでした。ロバの荷車でナセル病院へ搬送しようと試み、大量出血している中を 20 分以上歩きました。病院到着後、医師は即座に私の姉妹の死亡を確認しました」。

「ハディージャは 3 人の子供の母親であり、彼女の死は私たちの心に修復できない深い傷を残し、日常生活に埋めようのない空白をもたらしました。彼女は子どもたちにとって心の支えであり安全な避難所であり、細かいところにも気がつき、周囲の厳しい現実や苦難から可能な限り子どもを守ってきました。彼女の死により、子どもたちはこの厳しい現実を耐え抜く支えとなっていた安心感と温もりを奪われてしまいました」 23。

PCHR 職員が収集した 5 件の証言 - 米国支援施設内での女性殺害を伴う約 38 件の記録 24 - は、安全であるべき場所で恐ろしい殺害が行われたことを裏付けている。これらの事件では、IOF が食糧配布待機所にいた女性たちに、何の警告も無しに無差別な発砲が行われ、人道支援区域で複数の女性が殺害された。この攻撃は、致死的な武力行使を正当化できる脅威とは定義できない、完全非武装の女性を標的として行われた。多くの事件は、女性限定と指定された配布日に発砲が行われており、こうした襲撃の組織的性質と意図的な指示、そして直接的なジェノサイドの目的を示唆している。

23 PCHR staff received the testimony on 11 August 2025 at Martyr Mahmoud al-Mabhough School, al-Namsawi neighborhood, Khan Younis

24 PCHR's telephone interview with Dr. Ismail Thawabteh, Director General of the Government Media Office on 20 November 2025.

カウラ・アフメド・サレム（46 歳）は涙を浮かべながら、食糧配給所で姉マリアを失った瞬間を恐怖と悲嘆に暮れながら語った。

「IOF は、検問所の閉鎖を継続し、援助物資・食糧・医療品の流入を阻止する飢餓政策により、子どもや高齢者、患者を含む私たちの生活への制限を強化しました。その結果、ガザの人々は食糧と小麦粉の不足で路上で気絶していたり、多くの子どもが栄養失調に陥ってしまいました。

姉のマリアと私は小麦粉や食糧といった生活必需品すら不足しており、数日間は全く何もありませんでした。子どもたちは空腹のまま眠りにつき、子どもたちの栄養失調状態を考えると深い恐怖に襲われました。妹のマリアはアル・シャクーシュ地区の米国支援配布所へ向かい、少量の大豆、レンズ豆、小麦粉を持ち帰りました。私たちはその僅かな配給を神に感謝しました。

ある日、IOFが女性限定配布日を指定したため、マリアと私は一緒に行くことにしました。2025年7月24日、朝の6時頃、まだ眠っている子どもたちを残し、私たちはアスダア市からアル・シャクーシュ地区へ歩きました。午前8時頃到着すると、配布所は支援を受けようと待つ女性たちで混雑し、男性たちは配布所から離れた場所に待機していました。

到着すると、イスラエル軍の戦車とクレーンが目の前に配置されており、以前の発砲でこびり付いた乾いた血痕が地面に染みついています。恐怖が私たちを襲い、引き返そうとしましたが、マリアは拒否しました。その後、イスラエル兵が催涙スプレー入りの閃光手榴弾と焼夷弾を発射し、人々の目や体に焼けるような激しい痛みをもたらしました。群衆は混乱して押し合い、パニック状態で逃げ惑う中、IOFは拡声器で女性たちを脅し、後退するよう命令しました。

その瞬間、私は姉マリアを見失ってしまい、混乱の中彼女を探し始めました。極度の疲労で何度も転び、爆弾で足が焼けるように痛んでいました。突然、イスラエルのクレーンから無差別な発砲が始まりハディージャ・アブ・アンザが実弾で撃たれ、即死しました。12歳の少女と、フーリヤ・アル・シャラビ（ハリファ）という名前の妊婦も負傷し、大量の出血の末、死亡しました。

私は現場から逃げ出し、ウォーターウェル19地区にいる兄のもとへ向かいました。14時頃、マリアに電話すると、彼女は無事だと伝えてきました。再度電話をかけると、知らない女性がマリアは負傷したと告げ、電話を切りました。3度目の安否確認で、その女性から「あなたの姉妹は首に銃弾が直撃して死亡しました」と告げられ、衝撃を受けました。彼女は直ちに国際赤十字委員会（ICRC）野戦病院へ搬送されました。

姉のマリアは7年前に離婚し、元夫も2024年9月4日に殺害されていたことから、7人もの子どもが母も父もない状態で残されたのです。子どもたちは母親を失ったことで計り知れない精神的トラウマを経験し、保護も支援もなく、感情的に大きな空白を抱えながら、飢餓、生活必需品の不足、絶え間ない恐怖が蔓延するガザの極度に過酷な環境の中で喪失感と闘っています。子どもたちの名前はマラク（20歳）、クサイ（18歳）、マヤ（16歳）、ミラル（15歳）、マーリン（14歳）、ライアン（11歳）、スレイマン（8歳）で、今やガザを覆う抑圧された人道危機の中で、孤立して生きることを強いられています」[25](#)。

25 Testimony was obtained by PCHR's staff on 03 August 2025 in Asdaa City in Khan Yunis.

ハラ・アル・アヤム・エイヤド・シャラビヤ（16歳）は、人道支援センターで母親が警告もなく射殺される瞬間を目撃した恐怖と喪失の瞬間を語った。

「私たち家族は7人、そのうち3人が子どもです。父は失業中で、生活の基本的な必需品さえ買うことができません。戦争が始まって以来、私たちは極めて過酷で壊滅的な状況下で暮らしてきました。包囲が激化し食糧不足が悪化するにつれ、私たちはしばしば1日1食、通常はパンなしで生き延びてきました。全く食べられない日もあり、現場の炊き出しが提供するレンズ豆のスープで凌ぐことも多かったです。

2025年7月23日（水）・24日（木）は、ラファ西部（アル・シャクーシュ地区）に設立された米国支援センターで、女性が小麦粉や食糧を受け取る日と知りました。母のフリーア・モハメッド・マフムード・シャラビ（44歳）と私は、家族の空腹を満たす食糧を入手できると思い、配布センターに行くことにしました。

12時頃、酷暑と空腹、喉の渇きにもかかわらず、私たちはテントから徒歩で出発し、14時頃に配布所近くのアル・ジュラ地区に到着しました。そこで、散発的な銃撃があったため、焼け焦げたバスの陰に身を隠しました。その地域は、何千人もの人々で混雑していました。

散発的な銃撃が続く中、私たちはその場に約30分間留まっていました。当初、負傷者は見当たらなかったのですが、母が立ち上がった瞬間に激しい銃撃が突然始まりました。女性たちは後方へ走り出し、命を守るために地面に身を投げ出す者もいました。その時、母は一言も発せず仰向けに倒れてしまいました。頭部からの大量の出血を見て、私は即座に銃撃を受けたのだと悟りました。現場にいた2人の若者の助けを借り、母をより安全な場所へ引きずろうとした時に、別の女性を運んでいる人々が「彼女は殺された」と叫びながら走っていくのを目撃しました。

母の頭、鼻、口から血が流れ続けていました。約200メートル歩いたところでトゥクトゥク（三輪自動車）を見つけ、彼女を乗せました。まだ息はありましたが、現場では応急処置が施せず、私たちはラファのアル・マワシ地区にあるICRC野戦病院へ母を運び、直接受付部門へ行きました。そこで母は僅か3分間だけ診察を受け、私がドアのそばに立っていると、医師の1人が出てきて、母が負傷により亡くなったと告げました。私は衝撃で圧倒され、涙と叫び声をあげ、泣き声を抑えられず、胸に押し寄せる圧倒的な痛みと喪失感に抗えませんでした。

2025年7月25日（金）の朝、私の父、兄のワリド、姉妹の夫はカーン・ユニスにあるナセル病院に向かい、埋葬の手続きを済ませ、私の姉妹と私は交通手段がなく、行くことができませんでした。この出来事により、私たちは母を亡くし、かつ小麦粉もなく、食糧もなく、耐え難い生活環境、筆舌に尽くしがたい深い悲しみに堪えなければなりません」**26**。

26 Testimony obtained by PCHR's staff on 17 November 2025 in Ard Shurab displacement camp in Deir al-Balah.

2：米国支援物資配布所での女性の身体的損傷

アシール・ガジ・アブ・イッサ（16歳）は、戦争で父を失い、イスラエルの飢餓政策が日々彼らの肉体を蝕む中、飢えと死の間で母と共に自らと兄弟たちの生存をかけ、生き残るための闘いを強いられている少女である。

「戦争前は父と母、そして弟や妹たちと暮らしており、経済的にも恵まれていました。父が働き、私たちは安全を感じ、日々の必要を満たすのに十分な生活を送っていました。しかし戦争は私たちから全てを奪いました。数ヶ月前に父が殺されてからは、私たちの生活はひっくり返ってしまいました。父の死は、特に彼が家族唯一の稼ぎ手であったことから、深い精神的・経済的空白をもたらしました。戦争が激化し飢饉が深刻化するにつれ、パン1枚を手に入れることでさえ遠い夢となり、テントの中には食べる物は何もありませんでした。飢えが私たちを蝕み、7歳の弟は激しい空腹で夜通し泣き続けました。母と私は食糧を確保するため、あらゆる手段を模索せざるを得ませんでした。

米軍の配給所で支援物資が配布されていると聞いて、小麦粉や食糧を入手できるかもしれないと期待しました。

危険を承知の上でしたが、激しい空腹に駆られて行くことに決めました。

配布所に着くと、上空から入場許可の呼びかけが聞こえたので、中に入りましたが、支援センターはまだ開いていませんでした。突然、銃撃が私たちに向けられました。隣人の娘たちも一緒でしたが、殆どが負傷してしまい、1人は私の目の前で命を落としました。どうやって生き延びたのか分かりませんが、混乱と恐怖の中で何時間も母を見失ってしまいました。私が母を探し、母も私を探して、あの日は人生で最も辛い日でした。しばらくして、地元の女性たちを見つけ、彼女たちが私をテントまで連れ戻してくれ、そこで私は完全に打ちのめされた母を見つけました。その時点で、私たちは二度と援助配布所には戻らないと決めました。

しかし、IOF が強制した飢餓は異なる結果をもたらしました - 飢餓は容赦しないのです。母と私は 2025 年 10 月 9 日、今度は女性限定とされた日にアル・シャクーシュ地区の支援拠点へ再び向かいました。女性グループと共に赴きましたが、同じ光景が繰り返されてました。上空から入場許可の呼びかけが聞こえ、中に入った途端、それが罠だと判明しました。私達は再び無差別な銃撃に晒され、逃げ出す途中で喉の渇きが耐え難くなり、地面に座って水を飲もうとしたその時、何かが私の体を貫くのを感じました。意識を失う前に叫び声をあげ、母と他の女性たちが私を病院へ運んでくれました。傷は胸部に深く刻まれ、今日に至るまで持続的な痛みを苛まれ、動作が制限されています。傷口は繰り返し感染し膿が流れ、背を曲げられず、物を運ぶこともできず、若いのに高血圧も発症してしまいました。この負傷は精神にも深刻な影響を及ぼし、傷跡の影響で将来への不安と苛立ちに苛まれるようになりました。最も辛いのは、かつて母を助け家族を支えたいと思っていた私が、継続的な治療と介護を必要とする存在となり、家族に負担をかけてしまっていることです」 27。

27 Testimony obtained by PCHR's staff on 05 August 2025 at al-Aqsa Martyrs Hospital.

ガザ地区の女性や少女たちは、イスラエルの飢餓政策の支配下で、さらなる悲惨な状況に耐え、人道支援物資の配布拠点で命を危険に晒すことを余儀なくされてきた。女性限定配布日にさえ、彼女たちは IOF の標的となり、繰り返し銃撃され、深刻な身体的負傷を負った。これは、民間人保護と人間の尊厳という最も基本的な原則を無視した過酷な現実において、彼女たちが耐えなければならない肉体的・精神的苦痛をさらに増幅させた。

6 人の子供の母親であるマナール・ザカリア・サルマン・ハッタブ (37 歳) は、PCHR のスタッフに、極度の飢餓による自身と子供たちが経験した深刻な苦難、そして生存の最低限の手段を確保するために自らを危険に晒し、命を亡くすようなリスクを証言した。

「戦争はますます激化し、もはや爆撃や避難、慣れきってしまった苦難だけに留まらなくなりました。時が経つにつれ悲劇の様相は深まり、イスラエルによる制限は日増しに厳しさを増しました。生存手段さえも例外ではありません。IOF は検問所を閉鎖し、食糧や小麦粉の搬入を阻止し、缶詰すら禁止でした。私たちは小さな牢獄に閉じ込められ、日々悪化する状況の中で緩慢な死を待っていました。飢餓は破滅的に悪化し、特にまだ 2 歳にも満たない末っ子のザカリアをはじめとし、子どもたちは空腹で眠れなくなりました。私は子どもたちに何も与えられず、飢えに泣く姿を見守るしかありませんでした。夫は失業中で、収入源もなく家には食糧がありません。米国支援配布所が女性に割り当てられると発表された日、夫の反対にもかかわらず、私は一瞬も躊躇せず向かいました。子供たちへの強い想いが私を引き裂いていたのです。2025 年 7 月 24 日、正午ごろ、私は 14 歳の長女と隣人と共に、カーン・ユースのアル・ティナ地区にある支援配布所へ向けて出発しました。

到着した時、凄い人混みで、皆が急いで支援物資に手を伸ばし、空腹を和らげる何かを確保しようとしていまし

た。圧倒的な混乱の中、突然戦車と4つの回転翼を持つクアッドコプター・ドローンからの銃撃が私たちを直撃しました。弾丸の音がどんどん近づいて、突然、激しい熱が私の手を貫き、大量の血が噴き出しました。

娘は恐怖のあまり地面に崩れ落ち、「助けて！」と大声で叫びました。しかし誰も応じず、皆が食糧を求めて駆け回っていました。長い時間が経ち、私の手から大量の血が流れ続ける中、看護師という1人の若い男性が近づいてきてくれ、私の手を包帯で巻いて止血し、その場を離れるのを手伝ってくれました。やがてトゥクトゥクを見つけ、他の負傷者数人と共にアルアクサ殉教者病院へ運ばれました。医師は私の傷を貫通銃創と診断し、臍断裂と手の骨折があると説明し、金属棒（プラチナ製）を埋め込む必要があると告げました。負傷した日から、病院に辿り着くまで傷口が長時間開いたままだったので重度の感染症になり、医師たちは毎日創面切除術を行っています。金属棒を埋め込む手術を行うために、今も傷の治癒を待っている状態です。

あの日から、私は病院で寝たきりになり、子どもたちに食べ物を届けることも、自分の身の回りの世話さえできなくなりました。自らの苦しみに加え、私は負傷してしまった母親となり、極度の飢えで日々衰弱し、やせ細っていく子どもたちを助けることもできません。飢餓がこれほど深刻でなければ、子どもたちの絶え間ない泣き声を聞かず、その衰弱した姿を見なければ、私は命を懸けて支援物資をもらいに配給所へ行くことはなかったでしょう。しかし、飢えに苦しむ我が子が身もだえする姿を見れば、たとえ一口でも与えるために、持てる全てを犠牲にしようと決意するものです…でも、残念ながら、私は子どもたちの食糧を確保することも、自分自身を守ることもできなかったのです」 28。

28 Testimony obtained by PCHR's staff on 05 August 2025 at al-Aqsa Martyrs Hospital.

3：強制的な家族の役割の転換

マハ・リヤド・フセイン・ミゼル（35歳）は、支援物資の配布所で夫を失って以来、子どもたちの責任を一人で背負うことを余儀なくされた。彼女は、尊厳のある生活を送るための基本的手段が全く欠如している状況で、ガザの過酷な生活と非人間的な状況に立ち向かわなければならない、一家の唯一の稼ぎ手となった。

「私には4人の息子と1人の娘がいます。2025年7月18日は、飢餓の中で最も厳しい日でした。小麦粉1キログラムの価格は150シェケル（約40ドル）に達し、私たちには小麦粉も、食べ物も、水もありませんでした。夫は以前、負傷や死亡を恐れ、米国支援物資の配布所に行くことを拒んでいました。しかし、子どもたちの生命を確保するためなら何でも手に入れざるを得ない状況に追い込まれていたのです。

その日、山のような人々が支援拠点に押し寄せ、溢れんばかりでした。その混乱の中、夫は停車中の支援トラックの下に押し出されたのですが、そのトラックが突然動き出して頭部が轢かれてしまい、夫は即死でした。これは私が人生で経験した最も辛い瞬間でした。当時、私は妊娠7ヶ月で、夫は娘を授かることを願っていました。死ぬ前に、生まれる赤ちゃんが女の子とは知ってはいましたが、この夢が叶うのを見ることが出来ませんでした。

戦争が始まる前は、設備の整った家で夫と子どもたちと安定した平穏な生活を送っており、夫は私たちに安全と支えをもたらしてくれる存在でした。彼の死後、私の生活は完全に崩壊し、彼が提供していた安心感と支えを失いました。こうした厳しい状況下で、私は子どもたちのニーズを満たすこともできなくなりました。

現在、私は家族の一人親として、5人の子供たちの養育責任を一人で背負い、衣食住と安全の確保に多大な困難を抱えています。夫の死後数ヶ月間は深刻な鬱状態に陥り、特に末娘の出産後は、ミルクやおむつといった基本

的ニーズすら満たせませんでした。かつては夫が衣食住と安全を全て保障してくれていたのに、今ではそれが叶わないのです」 29。

29 Testimony obtained by PCHR's staff on 04 November 2025 in al-Nusirat refugee camp.

自分と子どもたちの食糧を確保しようとする民間人への IOF による繰り返される攻撃は、女性たちにとって二重の人道的悲劇をもたらした。多くの女性が突然、主な稼ぎ手である夫を失い、貧困、飢餓、病気に押しつぶされながら家族の唯一の養育者となった。この家族における役割の強制的転換は、女性から安全を奪い、代わりに死の現実をもたらした。子どもたちの食糧・医療・教育を確保する闘いが、継続的な暴力と愛する者の喪失による複雑な心理的トラウマと絡み合い、支援制度がないことや共同体的支援の欠如によってさらに悪化している。住居・食糧・清潔な水を含む全ての基本的な生活必需品が崩壊する中、彼女たちの日常は恐怖と苦しみの連続であり、生存をかけた容赦ない闘いとなっている。

アマル・スハイル・ハムダン・アル・バダウィ（36 歳）は、夫を失い、戦争の苛烈さと継続する苦難の深さの中で、子どもたちの養育と保護の責任を一人で背負わされるという、複合的な悲劇に直面している。

「私は、ジョーリ（8 歳）、ワシム（6 歳）、オマール（3 歳）の 3 人の子どもの母親です。私たちが生きる過酷な現実の中で、生存の源であるべき人道支援が、愛する者たちを奪う死の罠へと変わる姿を、毎日目の当たりにしています。家族と私は、生きるための最低限の必需品を得るために、最も高い代償を払ってきました。子どもたちを蝕む飢餓が悪化する中、夫は支援物資配布所へ向かうしかありませんでした。初めて行った時、彼は小麦粉 5 キロと缶詰を少し持って帰ってきました。私たちの喜びは言葉に尽くせず、まるでイード（イスラム教の祭日）を祝うかのようでした。2 度と行かないでと懇願し、あらゆるものを節約しましたが、その食糧はわずか 3 週間しか持ちませんでした。それが尽きると、夫はさらに 4 回も配布所に向かいましたが何も得られず、日々苛立っていました。全てを変えたあの日、夫のムサは早朝に私を起こし、疲れた声で言った。「アマル、十分に眠れなかった」休むように言ってやればよかったと後悔しましたが、私は「神のご加護がありますように。行って小麦粉を調達し、戻って休んでください」と言いました。

私たちの間では、私が電話で様子を確認し、彼が応答してすぐに切れば無事だとわかるという約束をしていました。その日は、彼を邪魔しないよう、私は素早く電話を切りました。すると間もなく、彼から電話がかかってきました。私は答えましたが、聞こえてくる声は彼の声ではありませんでした。不安に駆られて尋ねました。「あなたは誰？ムサはどこ？」すると男は言いました。「彼のために祈ってくれ。あなたの夫はナセル病院にいる」その瞬間、足元から地面が崩れ落ちたような気がしました。何も理解できなくなり、泣くことも動くこともできませんでした。服を着ると、姉のテントに駆け込み、姉の夫に病院へ連れて行ってくれるよう頼みました。途中、同じ男が再び電話をかけてきて、ムサが危篤状態で生死の境をさまよい、輸血が必要だと告げました。その時初めて事態の恐ろしさを完全に理解でき、私は叫び、泣き、夫を救って欲しいと神に祈りました。しかし病院に着くと、彼は遺体安置所の隣に横たわっており - 生きている姿は見ることができませんでした。私は彼のそばに座り、目を覚まして子どもたちの元へ戻ってほしいと懇願しました。彼なしでは生きられない子供たちのために。現場にいた人たちは、彼は群衆の中にはいなかったと教えてくれました。彼は後ろに立っていて、戻ってくる人々を待っていた時に銃弾に撃たれたのです。イスラエル軍にとってはただの無差別射撃であったのですが、私にとっては安全と心の平安を打ち砕く一発の銃弾でした。

子どもたちにどう伝えればいいのかわかりませんでした。ようやく話した時、子どもたちの衝撃は私のかけた言葉以上に強かった。子どもたちは泣きながら自分を責め、「お腹が空いていなかったら、行かせなければよかったのに、どうして『お腹を空かせて寝た』って言ったの？」と言いました。今でも夫がいなくなったことを完全に理解していません。彼の職場へ行き、近所の人に「彼はここにいないの？いつ戻ってくるの？」と尋ねに行ってしまう。私は今、収入源もなく、子どもたちを養うために必死で最低限の生活すら確保するのに苦労しています。私たちを支えるはずだったこの支援拠点は、子どもから父親を奪い、私から夫と支えを奪ったのです。私の役割は一夜にして変わり、同時に母親でもあり父親でもあり、子どもたちの日々の糧を提供する責任を負う存在となりました。この悲劇による精神的苦痛に耐えながら、私はこの人生を一人で生きているのです」 30。

30 Testimony obtained by PCHR's staff on 26 September 2025 in Tabaria displacement camp in Khan Yunis.

一方、シャディア・バルハス・アブ・ターハ（54歳）は、ガザの女性たちが、家族の主な稼ぎ手であった息子たちをも失った後、いかにして家族の役割を背負われたかを証言した。貧困と欠乏の中、愛する者を失った深い精神的苦痛に加え、生存と家族の世話という日々の重荷が完全に彼女たちの肩にのしかかっていった。

「私には7人の子供がいましたが、長男は戦争前に海外に移住したために、全ての責任が息子サエドに残され、彼が心の支えと喜びを私に与えてくれていました。彼は、椎間板ヘルニアやその他の慢性疾患で寝たきりの病弱な夫と、5人の兄弟姉妹、そして私の唯一の稼ぎ手でした。飢餓が悪化し米国の支援配布所が開設された時、サエドは当初行くことを拒んでいました。それは、配布所から帰ってくる人々の顔に死と屈辱を見て取ったからです。でも状況は耐え難いものとなり、家中の小麦粉が完全に尽き、5人の兄弟姉妹がたった1つのパンを分け合う姿を見た時、彼は誇りを捨てて家族の生存を選ばねばならないと感じ、命を懸けて行くことを決意しました。

彼は、支援物資を持ち帰ることに数回失敗しましたが、5回目の挑戦でようやく成功し、僅かな物資を持って帰還しました。その後も1週間、配布所に通いました。あの夜、彼は私に話しかけ、2度と行かないと言いました。彼は義兄と共に、私の人生を永遠に暗くするその日の朝まで起きていました。彼は異様に早く目を覚まし、私を起こさず出発してしまいました。目が覚めた私は彼を探し始め、徐々に忍びよるような恐怖が私を襲いました。その瞬間、まるで剣が心臓を貫き、反対側から突き抜けたような気がして、私は飛び起きて携帯電話を手に取ると、彼からの不在着信がありました。折り返し電話しましたが応答はなく、もう一度試みましたが。通話は繋がったのですが、声はサエドではなく、その聞き覚えのない声を聞いた瞬間、私は苦い真実を悟り、それを受け入れようと思いました。震える声で尋ねました。「私の息子、サエドはどこにいるの？」彼は私の恐怖を裏付けるように答えました。「この電話の持ち主は殺害されました。ナセル病院の身元不明遺体の中にいます」その言葉を聞き終えるや、私は地面に崩れ落ち、意識を失いました。

最後の別れを告げに彼のもとへ行きました。彼を見つめ、傷に触れました。首の後ろを撃たれていました。目撃者によれば、息子は誰が後ろにいるのか、確かめるために振り返った瞬間に撃たれたということでした。平和にただ立っただけだったのに、身を守れなかったのです。私は彼の香りを最後にもう一度吸い込みました。外に出ると彼の友人たちがいたので、打ちのめされた心でこう言いました。「君たちは彼を英雄と呼んでいた。英雄とは最後までその物語を全うするものなのに、なぜ私の英雄はこんなに早く奪われてしまったの？」今、私は打ち砕かれた心で立っています。唯一の支えが消えたのだから。この悲劇の心理的影響は悲嘆を超え - それは安全感そのもの、そして生命そのものの崩壊でした。私は恐怖と不安に苛まれ、明日をどう生きればいいのか、娘たちと病める夫をどう養えばいいのか、見当もつきません。この苦しみは無力感と絶望から生まれており、1斤のパンの代償が私の命と、最も愛する者の命だったという思いに苛まれています」 31。

4 : 女性への屈辱的な処遇

A.A.さん (55 歳) は、PCHR スタッフに対し、支援物資を入手しようとする過程で直面した苦痛と屈辱について次のように語った。

「私は英語教師で、以前は生徒に個人レッスンをしていました。しかし、耐え難い苦難が深刻化し、健康状態と経済状況が悪化するにつれ、子どものない夫婦であること、夫が病気で歩けないことから、生きるための糧を確保するため、米国の支援配布所に行くしかありませんでした。交通手段が全く手配できず、配布所まで長距離を歩かざるを得ませんでした。同時に、私はもはやそのような過酷な歩行に耐えられる年齢でもなく、配布所を囲む有刺鉄線による生じた、痛みを伴う裂傷や傷を負いながらも足を引きずりながら歩きました。衣服も何度も破れました。

ある時は歩く力も尽きて借金して動物が引く荷車に乗りましたが、転落して命を落としかけ、骨盤を砕くかと思いました。間一髪で別の荷車に轢かれそうにもなりました。その日は泣きながら座り込み、「なんて屈辱なんだ！」と叫びました。私たちは繰り返し屈辱を味わわれました。灼熱の太陽の下で何時間も立ち、長い列に並んで順番を待ちました。当初は職員が高齢者を優先しようとしていましたが、人数と混雑が増すにつれて状況は一変し、何時間も立ち続けた挙句、結局「支援物資は既に全て配布済み」と告げられ、手ぶらで帰られることも頻繁になりました。その日は女性限定と知らされ、長い道のりを歩いて到着すると「今日はもう支援物資はありません」と言われることもあり、そうした瞬間に、失望が私たちの残されたエネルギーと忍耐を搾り取っていきました。さらに、催涙ガスを繰り返し浴びせられ、窒息しそうになり、過密状態の混乱の中で屈辱感は増すばかりでした。押し倒されて立ち上がれなかったこともありました。年老いた身では容易ではありませんでしたが、踏み潰されないよう、必死に身を起こさねばならなりません。これが命をつなぐわずかな支援を得るために、私たちの受けている屈辱です」 32。

32 Testimony obtained by PCHR's staff on 23 November 2025 in al-Namsawi neighborhood in Khan Yunis.

ガザ地区に設置された米国支援配布拠点では、女性たちが多面的に深刻かつ屈辱的な扱いを受けてきた。輸送手段の欠如や高額な費用のため、避難先から時には 5 キロを超える過酷な距離を歩かされた。しかも、広範な飢餓と栄養失調により身体能力が著しく低下している状況下での移動である。灼熱の夏の暑さと炎天下を歩かされ、身体はさらに消耗し苦痛が増幅された。多くの女性が足に負傷や出血を負い、道中に散乱する瓦礫や有刺鉄線によって靴や衣服が破れた。尊厳を保ち危害から守る仕組みが全くない中、過密状態による踏みつけ被害も多数発生した。

支援物資配布所で待機中、女性たちは催涙ガス弾、ペッパースプレー、銃撃に晒され、あらゆる手段で身を守ることを余儀なくされる深刻な危険と絶え間ない恐怖に直面した。耐え難い苦痛と屈辱を経験しながらも、子どもたちが忍耐と希望を持って食糧を待つ中、女性たちが何も受け取れずに手ぶらで帰還した時、抑圧と屈辱感はさらに深まった。

リハム・アブ・サアダ (37 歳) は、子どもたちのための支援物資を受け取ろうとした際に受けた過酷で屈辱的な扱いについて、パレスチナ人権センター (PCHR) のスタッフに次のように語った。

「私は結婚しており、3人の子供がいます。2025年7月24日、イスラエルに強制されたガザ封鎖下で飢餓が悪化する中、私は米国支援物資の配布所へ子どもたちの食料を確保しに行かざるおえない状況にありました。夫は病気で手が不自由なため、働くことも配給所に行くこともできず、私を助けることができませんでした。

米国支持配給所に行く必要があると伝えた時、夫は最初は拒否しましたが、私たちの困難な状況と食糧の緊急性が他の全てを上回りました。私は長い距離を歩かなければならず、時には2～3時間も歩き続け、長時間の歩行で足から血が流れ出し、靴は破れ、足に怪我を負いました。さらに、IOFが催涙スプレーを噴射し、窒息状態に追い込むという屈辱と侮辱を受けました。これは真夏の猛暑の最中に起こり、午前10時～午後1時に炎天下に立たされた時、私は熱中症に陥りました。私たちは水を求めましたが、誰も応答しませんでした。その瞬間、屈辱と抑圧感がさらに強まりました。また、支援物資を運ぶ際に肩の靭帯を損傷し、避難民キャンプまで運ぶ代わりに物資を分けよと要求する運転手たちから脅迫を受けました。時には一部の女性だけが支援を受け、私は手ぶらで子供たちの元へ戻らねばならず、子ども目の悲しみを前に無力感と抑圧に苛まれました。支援を受けに行く途中では銃撃に遭うことがあり、ただ食糧を得るためではなく、子供たちの元へ無事に帰れるよう、自らを守ろうと極度の恐怖に襲われました。私は死をこの目で見ています。女性が負傷するのを目撃し、子どもが背中に砲弾を撃ち込まれるのを目撃しました。こうした配給は救済の手段ではなく、私たちに辱め、殺すためのツールになっていました」³³。

³³ Testimony obtained by PCHR's staff on 23 November 2025 in al-Namsawi neighborhood in Khan Yunis.

結論と提言

生存している女性や目撃者からの証言に基づき、本報告書はガザ地区に設置された GHF が米国支援物資配布拠点を IOF が標的とした際、女性が被った組織的かつ重大な侵害行為を記録した。これらの侵害には直接的な殺害、重度の身体損傷、人間の尊厳の貶め、子供や配偶者の喪失、それに伴う社会的役割の強制的な転換が含まれていた。

本報告書は、人道支援が生存手段から、ガザ住民の絶滅を目的とした意図的なイスラエル政策のツールへと変質した、悲劇的かつ組織的な現実を反映している。これらの侵害行為は、国際法で保護される集団に対する意図的な殺害、深刻な身体的・精神的危害、および集団の一部もしくは完全な破壊を伴うジェノサイドによる罪を構成する。IOF は 2023 年 10 月 7 日以降、女性を含むガザ住民に対し、エスカレーションされた組織的な方法でこれらの行為を継続している。

したがって、PCHR は国際社会に対し、法的・道義的責任を果たし、ガザにおける深刻な人権侵害を招いた支援物資配給政策に関与した全ての関係者を責任追及するための緊急措置を講じるよう要請する。これには、当該政策の実施を承認または監督した軍・政治関係者、ならびにその実行を助長または関与した者も含まれる。PCHR は、責任者を確実に追及し、民間人に対する犯罪の継続を助長してきた不処罰の風潮を終わらせるため、必要な法的措置を全て講じる重要性を強調する。